



六道士會錄

四

~ 13
3041
4



六道士會錄卷之四

目錄

太平記評判之評

智惠才覚之辨

文武本一徳之辨

心氣之辨

心法之辨

松谿子闇魔城不玉系

二會錄卷之四目錄

門へ 13
3041
巻 4

七會録卷四目録

目録
六道士會録卷之四
左平記評判之評
末座の人かんいんく左平記乃評判ハいので
あゝ後ほ給よや上座かん人いひあはは左平
記の評判ハ楠正成を宗として論じらる物
此正成は志太義成まゝく一毫
私かく保ち時小あゝいんく泉の湧出
おのゝ人情に應じ士卒かん信服
まは法出し是故極し是を育以故

昭和九年
七月三日
購求

六道士會録卷之四 佚斎樗山著

左平記評判之評

末座の人かんいんく左平記乃評判ハいので

あゝ後ほ給よや上座かん人いひあはは左平

記の評判ハ楠正成を宗として論じらる物

此正成は志太義成まゝく一毫

私かく保ち時小あゝいんく泉の湧出

おのゝ人情に應じ士卒かん信服

まは法出し是故極し是を育以故

七會録卷四

士卒^{しそ}の^お重^{おも}む^びじて^うさ^ごひ^るひ^くこと^しれ
 家^け長^{ちやう}郎^{らう}從^{じゆ}一^{いつ}人^{にん}と^くく^て教^{てき}不^ふ與^よ一^{いつ}切^{せつ}志^し
 一^{いつ}者^{しや}れ^は是^{こゝ}不^ふお^わく^そを^じ実^{じつ}故^こう^じと^す
 評^{ひやう}者^{しや}の^{こゝ}言^{こと}を^ま正^{ただ}成^{じやう}を^り以^{もつ}宗^{しゆ}と^しん^んを^いて^も
 其^{その}志^し功^{こう}利^り故^こ主^{しゆ}と^{して}之^いを^き乃^{すなは}り^とく^に
 出^いづ^る者^{しや}ま^つ至^し是^{こゝ}正^{ただ}成^{じやう}れ^は法^{ほう}を^し知^して^正成^{じやう}の^し
 一^{いつ}後^ごさ^して^去る^る者^{しや}れ^は其^{その}中^{ちゆう}に^論
 を^し依^よ不^ふ理^りと^りし^て他^たの^兵書^{しよ}不^ふ比^ひせ^られ^ば
 と^し取^とり^おほ^く初^{しゆ}学^{がく}乃^{すなは}ち^才故^こも^とら^みは^重

室^{むろ}なる^書を^つ至^し然^{ぜん}と^し功^{こう}利^りの^私其^{その}志^し掩^{おほ}ふ
 べ^くら^ざ依^よ不^ふあり^是不^ふ習^{じゆ}小^{せう}時^{とき}ハ^大不^ふ心^{しん}術^{じゆつ}の^害
 害^{がい}あり^故不^ふを^書故^こ讀^{よみ}者^{しや}其^{その}け^はと^才力^{りき}れ
 一^{いつ}是^{これ}へ^いよ^ひま^りと^し取^とべ^くして^そ志^しを^学ぶ^べく
 以^{こゝ}是^{これ}兵^{へい}書^{しよ}評^{ひやう}判^{はん}を^んの^傳なり^一切^{せつ}乃^{すなは}ち
 其^{その}益^{えき}故^こも^そ害^{がい}故^こ推^{おし}する^時を^天下^{てん}用^{よう}ゆ
 べ^くら^ざ依^よ不^ふ乃^{すなは}物^{ぶつ}れ^一九^くて^物不^ふ執^{しつ}する^時ハ^害
 一^{いつ}何^{なに}り^推する^時も^用ふ^不得^ず一^{いつ}只^{ただ}そ^を中^{ちゆう}に^正
 用^{よう}く^不正^{ただ}故^こ用^{よう}ひ^ざる^時も^害れ^一

同何^{どうなに}に以^{もつ}てり功利^{こうり}乃^{なり}私^ひを情^{じやう}掩^{おほ}ふべしと
 ことと知るや回^{へい}悉^{しつ}くみはわづらへくも一^{いつ}二^に
 戎^{じやう}挙^げく終^{つひ}くハ官^{くわん}軍^{ぐん}の損^{そん}根^{こん}故^こ引^ひ返^{へん}とみ
 こゝの評^{ひやう}よ云^い東^{とう}四^し乃^{なり}武^ぶ士^し武^ぶ田^{でん}去^こ登^{とう}桃^{とう}井^{せい}石^{せき}
 堂^{どう}故^こ初^{しよ}として廿^{じふ}八^{はち}人^{にん}連^{れん}判^{ぱん}中^{ちゆう}誓^{せい}言^{げん}氏^し帝^{てい}を以^{もつ}て
 義^ぎ貞^{てい}中^{ちゆう}方^{かう}に中^{ちゆう}ぎ^ぎけりハ家^けこそる氏^しの卜^う
 知^ちみ從^{じゆう}ふことな^なえ小^{せう}ま^まの^の今^{いま}云^い家^けの政^{せい}
 道^{だう}邪^{じや}なるに上^{じやう}の^の天下^{てんか}れ武^ぶ士^し憤^{ふん}不^ふ也^や
 孝^{かう}小^{せう}る氏^し胡^こ歎^{たん}と成^{なり}け^けハ一^{いつ}往^{わう}下^げ知^ちみ

去^ここ^こが^が不^ふち^ちり^り義^ぎ貞^{てい}り^り公^{こう}家^けの^の無^む乃^{なり}を^を誅^{しゆう}
 して天下^{てんか}れ武^ぶ士^し故^こ助^{すけ}者^{しや}給^{たま}ふ何^{なん}ん^ん由^{よし}方^{かた}
 小^{せう}ま^まの^の此^こ連^{れん}判^{ぱん}不^ふ限^{げん}く^く誰^{たれ}り
 東^{とう}四^し小^{せう}お^おわ^わく^く弓^{きゆう}矢^や故^こ五^ご好^{こう}の^の者^{しや}義^ぎ貞^{てい}み
 第^{だい}一^{いつ}を^を不^ふた^た故^こ存^{ぞん}る^る其^{その}何^{なん}ん^んや^や子^こく^く公^{こう}
 家^け合^が神^{しん}の^の如^{ごと}いと^とを^を入^いけ^け給^{たま}ふ皆^{みな}幕^{まく}下^かに
 系^{けい}つ^つ忠^{ちゆう}義^ぎと^と被^ひさん^{さん}け^け者^{しや}宜^{よろ}く^く中^{ちゆう}給^{たま}へ^へと^と由^{よし}言^{げん}
 舟^{ふね}田^{でん}下^か山^{さん}加^かく^く美^みが^が方^{かた}ま^まく^く中^{ちゆう}越^えく^くこれ^{これ}も
 義^ぎ貞^{てい}一^{いつ}礼^{らい}して^{して}い^いく^く君^{きみ}君^{きみ}く^く比^ひとも^{とも}比^ひ

以て亂しすんはるべし今予氏之隠謀
 一戦不利と失ぬまゝ天下此人に心うた
 ずるに何の故もれく我と亦胡敵とるん
 才天下此人豈耻哉知る者といはんや
 榮へる徳人子指をたしまんより屍骸軍の
 晒して名を子孫乃後榮に残さんと存る也
 とて終不取し一始に故小下山加る我を
 為失より是我貞義子知して欲不ひり也

以私のこめよ心は動りまゝ依者れつ万世忠
 臣乃程まつ王赤松律師則祐り類はあは
 然るにの評判よいく彰回れやまゝ忠あ
 り王勇何り我小あゝ一殺多生を助るの
 乃何り湯武乃道ちりと云く此評者功利
 とまゝして我とりよこと我知るされ忠哉
 とならぬめ我れく我をたれして忠なり評者
 吾何を我忠と覚へる評人不審これ未也
 の人不義ふた故勧るの評あり故不此に

論曰功利乃徒也也其然湯武を以て不
の口實といふ程子後生は恐るる上は樂討
の魚外く下湯武は聖にあらずんば則と
へんは断り終る賢者の後世に
ひるるに深しうは樂討は恐るる天下は生民
猶一人に在るに在りて独まとなるる下
侯おして湯武を以て己ことを得て
て天小暇い人情不應一軍故あり終る其
さへ武王討ぐ自殺の後討ぐ子武庚と云く

去りぞ此終る天下武庚を以てせんて
武王故君といふ己こと故は討ぐもの也ま
子下の評は曰義貞世のこめ家はこめ故之
を以て只一身を重むむる亦小の事也其
謂たり少といへば是亦功利乃りしるの心
出て不義れ言を吐くこと故去るは力を
めく家故富んことち君子は為さ家不
此軍元來新田足利乃争論より争起る
天白義貞に與一ありは子孫氏朝敵也

たり家然るに今義貞乃家此れあてて胡敵と
 ありてんみち赤松律師則祐とおれど金吾殿
 の切さるるも乃そ義貞勇ま伐つて敵を侮り
 知謀れ足ざれば不を評する可なり胡敵とあり
 申して家と滅ぼしとそ一家者不義の玉極
 かり又楠正儀細川頼之が拓きに應ぜさせを
 誅して、そく三代の楠知是るべして二代討
 死し正儀以て尔さるり邪なるの邪を以て
 するの乃とあらばといひてそ一家此れ亦も

亦周武を以ていへつる邪を伐よ正を以て
 する事ち古人も是あつていまも邪を以て
 事成さるるかのごとき私言弁平り亦是
 す楠三代忠義しく家を以て勇まも持これ
 だるる末代た義乃名ち残るるれたら以後
 目を揆て後さるありても是二心なり二心ハ
 孟子の恥家不さるり豫讓が假母も趙孟に
 事へさるる志ハ古人の歎稱する不ならぬ嗚呼
 正儀乃志を万世に師と云い居るあり評

者のいふごとく假小ぬ軍に仕へく時故ま
 内み心儀病死せば万代悪名をなす父兄乃
 面を垢に者なり中庸小回邦道な起時ハ
 死小至家まぐく変せむといへる正儀乃謂
 処一難支場小居く始終志を變せざる所
 多父兄小劣家不いさくもれ一謀の足さ家
 ち生質乃不才ちつ至不若くハいふべく以評
 者ハ志むく正儀故そ一功利乃心よりえ
 取時ハたもあべ一乃より見時を簡然す

半れ一父兄の時ち上唯あま正儀ハ逆境
 一居て志を失るを依者なり是等も其
 一二を挙るくの如ハことぐを論せへ
 一且自己心俸れ天理故まとして是故
 詳みして可なる

智ある分る才覺るの辨

智ハ我が心俸知るより大なるち好乃
 理小あまううめて帰るこそれく體の物を
 写して些も私をたがごとく心を智といふ

心俸の靈明まつるに思ふに用ひ多し彼を是
 と此故非と分り是と分別といふ意識
 の他用まつる意識ハ知覺まつる知覺の働き
 利用不巧な故と才覚といふ是生質は器用
 かり道理と主として私を主時ハ分る才覚
 も知乃用をたひ正成是れ主役人主君の命
 故なき由らりて事とたふかおる今此人
 其乃理不かり分る才覚不巧ありて
 おのれと利する哉知といふ評者の論乃類此

まつる主君の命故交むして役人私の働を
 其らごとく一知を主といへ一意識乃才
 覚故主とせべし
 文武存一徳之辨
 又いふく文武ち力と一徳れ主總く小時
 ち天地の造化不則つまう陰陽乃化と布
 人民安く物各其不故巧を生た故遂は乃
 乃れ主分る小時礼樂を教育主師の乃
 是故文といふ春夏れ陽氣万物故生長也

不^レりごとく一^レ政^ニ不^レ従^グん^ノ暴^ニ悪^ニせ^レて人
 民^ヲ喜^ムし^レ國家^ニ猶^スん^ノ者^ヲ罰^ス一^レ其^ノ屈^ス
 不^レ伸^ル是^レ武^トし^レ不^レ秋^冬乃^レ陰^ノ氣^ヲ
 物^ニ収^メ一^レ實^ニ固^ク一^レ武^ニ
 殺^シ伐^スを好^ム不^レ阿^ラん^ノ殺^シ伐^スを受^クる者^ハの
 是^レ不^レあ^ラん^ノ實^ニを固^ク一^レ實^ニ固^ク
 受^クる者^ハ不^レ令^レ廢^ス風^ハ一^レ受^クる者
 の實^ニよ^リ生^レ殺^分武^ニ一^レ受^クる者

て怯^ム者^ハ是^レ不^レ依^テ身^ヲを^レ得^ル悔^ム
 かり者^ハ勿^レ心^ヲ身^ヲ命^ヲを^レ換^ス生^レ殺^ハ皆^ク
 是^レを^レ造^シ化^スを^レ心^ヲ一^レ風^ヲを^レ受^クる者^ハ
 心^ヲ一^レ生^レ殺^スを^レ人^ヲ有^ル心^ヲ一^レ造^シ化^ス
 不^レ則^ス一^レ受^クる者^ハ亦^レ有^ル一^レ生^レ
 殺^ス一^レ理^ハ一^レ皆^ク一^レ受^クる者^ハ
 戈^ヲ止^ムの字^ハ合^セ武^ノ字^ハ作^ル平
 竟^ニ法^ヲ治^ヲ助^ス一^レ陰^ヲ陽^ニ
 合^ス一^レ陽^ヲ陰^ヲ合^ス一^レ文^ノ象^ノ時

ち武を合あまざるあてしああてざるあ武といへば
 文を合あまざるあてしああてざるあ武といへば
 武は文と備そふ偏へん廢えいせむはるは是これ陰陽一
 氣天地生せいる自然じぜんの道みちれり故ゆゑ不あ治ちせしハ文
 不あ治ちるは四よ天てん下かを安やすむは武を備そへる犯とがすはる
 一いつはだはまるたは志こころめる礼らいせしハ武ぶを以もつ暴ぼう西せい
 の者もの以もつ罰ばつ一い文ぶんハ備そへる民たみを安やすむは此こゝ實じつに
 志こころめる治ち世せいに武ぶハ備そへるとは時ときある民たみ法はふにおし
 暴ぼう西せいの者もの生せいずるて四よ争そうるは礼らいをに文ぶん



此の時も人情安むせいで士民の心に治る
以又まよ武ハ虎狼乃猛きがごとく是は武
也よへうび武なき文ハ偽尼れ慈悲心慈厚
のこゝし是は文といひふ癒うび共ふ天下を
家治むべうん

心気之辨

又回一身の動静を皆氣に作用かり此れ
活する時を決り力に流り滞り居ることれ
して形小病を交ふ事少れ好悪の情溢り

に執滞せざる時を内迫るこれ神困むこ
とれ情ハ心の物不觸てうこれつ僅小動
く時を氣小り心も氣れ冥あり心也
氣とお甜むさ家ものなり故不好悪の情
動て溢る位に執滞する時ハ内塞つと
神安うび神安うさ依時ハ内いよく暗し
是小よのち氣滞り流り通小よハ五臟
病起生じ形体も亦別健なる事あるは
氣少心とお難さ依中者少に試て知

遍し心憂家時をれ塞り亦れ疲る時ハ
 心くきみほく知べし知る事おれ心といひ
 知ずるたれれといふ又いづく書を讀むて
 生死禍福幽明鬼神乃理を知るといへども心
 裏の迷恨断せざ依内ち情の動く不ぬ
 のまじくそ理に安むざる事あそんご依共
 れるに命に安むざる事能はざる時ハ神困む
 こし故免る事い故不靜なる時を書はよ
 むづくそ理を悟り是を心み試し物不接る時

此情の動く不ぬ情で情よいづくこと如
 内に省きて心乃感しお解べし只情のい
 不ぬは感やよくしていづくそ理に知
 ぬいづくも制しづき物あり大丈夫乃志
 不用不ユま此一路小あつる

心法と談

又いづく人心か不吾れ只欲る亦を又
 として此小いれ私念生し之識是故助を
 て種々の巧なれ偽も是より生れ偽巧

のう海を以人ぢ欺きおのほり欲じるを
 遂むとい此にな以て物不接系時を親族
 む活ましうづひ朋友和せ人とな並じえく
 争てい家こあてん比を本を欲する亦に
 いれえりいづりうそ情を制することあ
 らび欲心内ふふく内心忙しく神安
 す仁家は是ぢ苦境といひ苦境よ入て
 つうく娛といふ者も惑へるれ心ぢ安
 こころを中より善はれ一孟子のい

知者もそ無事なる所ぢ切婦といつるを
 事とけこしち一言の足らふあぢ大智
 の人みあづむんハ無事ぢ切婦とあぢ
 人おほく我務によな事ぢまて事
 謀家いりりして甚ぢういぢお似
 つる故小変小なうく大ま小轉動以只と免
 より爰ぢるまて一変ぢ考へ怯て事ぢ係
 時ちゆきあぢ家これ一武士ハ孝に變ぢ
 するづらん貪も士の恥あぢ偽巧の事

とありてありては市中不面なる
 よりも恥なり
 吾等といふ己こと故ほして應ぶるれ聖人
 身をむこと故ほして應ぶる者聖人の
 まにして過はくか一事を正へて
 時を私意おこは私意を改むも巧まらざ
 いども終あることよくれ毎小試く知べ
 己こと故ほして應ぶる者衷心常に静を
 至理のまにゆるぐゆへあり事を正へて勤

者衷心常に忙しく私意の巧故容家が故之
 曲時の運切日月れり度凡雷る為事
 此陰陽をお盪ふよの事自然不動く
 己こと故得ざれ者外聖人易故作つて
 陰陽造化れ理不原いそ此心体と志め
 終小邵康節のいそく先天之学ハ心法也
 六十四卦の爻及皆自然不動て己ことと
 自ら者外聖人一毫も他意故用家不
 聖人の一言一切皆易ふあはむといふこと

後の聖人故学ぶ者も聖人乃言はざる
 則と以應接乃ありざる也易も從ひて動て
 之の易も去るは易の造化此神道物不倖
 て遺ひてくざる者外も吉凶悔吝ハ變化
 應用乃ありたり故も易も去るは易者ハ吉
 ろり易も恃く者ハ凶なり是著策故擇
 ばて孝にト筮する者外も易曰不恒其
 德或柔之羞孔子曰不占而已矣孔子心
 決せざることある時無齋戒して神不問の

こそ至誠の感ハ懐度して去る亦よ何んば今
 故もくして物も吉凶を占ふ神何を告ん
 や占りて吉凶乃兆ありといふもこれ其
 の意あり神の告み何んば故も易も小人
 かんこめ小禱るはといふも天理は自然志
 ざらざるも爰に精一きをたすべし徳之私
 を用ふることれく己こと成らずして勤く者
 易故讀むて易もく易もく易もく易もく
 易を無事成りゆ

松谿子閻魔城不玉法

松谿子セウシ末席マセキ不フ在在くキ坐イ居イしシじジぐグ敷シくク
 文カキをレ紙シにシ席セキにシ紙シしてシ出デぬヌをレ紙シよりリ書カるルをレ
 けりケリ往ユキけりケリはハ鉄テツのノ橋ハシ門カドありリ内ウチみミちチらラ鉄テツ
 炮ヤ亦モみミちチ長ナガ柄カバ云ク乃ハ具ツをレあハくク牛ウシ頭カビをレ
 既ツ乃ハ鬼キともモ鉄テツ持カとツ乃ハ内ウチをレ書カるル乃ハ唐タウ
 人ヒトもモ日ヒなナ人ヒトともモ志シとツ奴ヌ者モノ出デてテ寫シるル乃ハ其ソノ
 姓セイ名ナをレ官クワンハハ俱ク生シ神カミとツ答コタへテ松谿セウシとツてテ亦モ
 至シ及ツくク閻魔エノマのノ状シヤウ付ツキみミくクすスしシまマひヒくクとツ

いイふフくクへヘくク回ヘ我ガハハ汝ニとツ俱ク不フ生シとツくク片ヘ時トキもモ
 汝ニがガ身ミたタえエれレとツがガ家カ者モノ外ソトにニ故コ不フ汝ニ一ヒト念ネン愛アイ
 家カをレめメおオわワくク善ゼン悪アクすスがガ志シりリてテ即ソクちチ
 性シヤウ面メン不フ志シくク一ヒト重ジュウ積シキくク閻魔エノマのノ由ユ目メにニかカくク之シ
 儒ニウ家カみミちチ我ガ心シンのノ神カミ明メイとツ名ナ付ツキ亦モ良リヤウ智チとツ
 之シのノ小コ大ダイ学ガク誠セイ意イ乃ハ章シヤウのノ傳デンよヨ母ハハ自ジ欺キといイ
 小コをレ我ガ心シン乃ハ神カミ明メイ故コあアがガむムくクことトなナれレやヤ
 いイのノ後ノチちチりリ中チュウ庸ユウ不フ其ソノ瞞マンがガ法ホウ所ショ不フ戒ケイ怯セツしシ
 閑カンがガるル所ショよヨ恐クウ懼クすスことトいイふフもモ人ヒトのノ見ミゆユ不フわワ

かろしこも^{おれ}おはうくいとあらしぬを以て云
きり^{きり}松谿子ゆておもゆひのなりぬ人乃付
そのありき終ふ事うれといふ^く僕生神の曰
い^ちまのこ^ち気^ちは^ちう^ちい^ち給^ちか^ち一^ち念^ち心^ちを^ち改^ちる^ち付
か^ちま^ち怯^ちた^ちら^ちと^ちなり^ち故^ちは^ち論^ち理^ちよ^ち過^ち則^ち勿^ち
改^ちと^ちい^ちふ^ちあり^ちと^ちう^ちら^ちあ^ちう^ちお^ちつ^ちて
ゆく^ちほど^ちに^ち救^ちの^ち拂^ちつ^ちら^ちる^ちく^ち閻^ち魔^ち城^ち小
玉^ちま^ちあり^ち

士會録卷之四終

